

[巻頭言]

公認心理師 誕生

発達心理臨床研究センター長

海野 千畝子

発達心理臨床研究センターの役割は、当たり前な感情を何らかの理由で歪ませざるを得なかった方々に、当たり前な感情を取り戻す姿勢を応援する中枢であるとも思う。

先日、第13回日本子ども虐待防止学会中のことである。学会員のN先生（福祉領域心理職）の方から「先生公認心理師試験結果どうでしたか？」と声をかけられた。はじめて、学会初日が公認心理師の合格発表日であることを認識する。ホームページに合格者一覧が載るため、番号さえ控えていれば、合否は判断できるが、自分は大学内研究室に受験票等を置いてきた為、三日後の月曜日まで結果はわからない。「先生、大物ですね。先生、60%以上正解で8割合格でしたから大丈夫ですよ」等と慰められる。厚生労働省のホームページをみると合格率79.6%とある。点数配分について、二択問題は全問正解で1点、事例問題3点とある。『落ちたかも・・・』と頭をかすめた。

この試験が現任者にとり残酷なのは、自分が指導教官として3月に送り出した修了生も机を並べて受験したことである。「先生のご指導のおかげで合格できました」等と社交辞令交えたメールが届く。ドギマギしながら「おめでとう」と返信するのがやっとであった。

その後は回避の防衛機制で学会に集中して、ホテルに帰ると明日の学会発表準備が難なく終了した。いつもなら家にいる子どもや犬達のことを想いを馳せるが、今日は試験結果についてのことが押し寄せてきた。ネットにつなぎ、最初に検索したのが「公認心理師 不合格」である。回避から一歩前に進む。著書あり、講師などの教育歴がある人も不合格である。『私のことだ』と仲間がいたことで慰められる。そのうちにゼミ修了生から合格メールが届き、『もしかしたら自分も合格しているかも・・・』と気を持ち直す。『いやいや落ちていたらショックが増すではないか』等と逡巡する。学会二日目、発表を終えて、仲間との懇親会の参加後はお酒の勢いで不安や恐怖を解離して睡眠に入る。三日目は子ども虐待専門家会議で、一時保護所議論に熱中して回避する。夕方家に着くと家事子育てがあるので回避する。誰もが寝静まる頃、やっと棚に上げた現実と直面となる。明日はゼミが昼夜あるから、不合格で落ちていたらその後のパフォーマンスが下がる。夕方見るしかない。と受験結果を見るタイミングを定めた。

翌日、『逃げて同じだ』と計画した時間に心理研修センターHPを開け、付け合わせてみると、何と自分の受験番号があったのである。『合格していた。セーフだ』妙な興奮が高まる。『ソラちゃんありがとう』亡き飼い犬や受験に協力してくれた家族に感謝の念が出る。情けないことに、公認心理師になれたことより、何とか周囲に面目を果たせたのが嬉しかった。自分の弱さだと直面した。自分は当たり前な怯える感情を持つ人間なのだ。

セラピストとして『あたかも・・・のような』という共感能力を今後も研ぎ澄ますには、日々の生活上の些細な自己認識が必要であろう。時に、この弱い自分の例のように、様々な事態に直面してもがく経験がその後心理臨床の技能に通じる光になるのだから。